

ルワンダ内戦経験、福島在住の女性

# 生き抜いていま支援

民族対立によって100万人が犠牲になったともいわれるアフリカのルワンダ内戦。現地では支援活動を進めるNPO代表で、福島市在住のカンベンガ・マリールイズさん(45)が30日、岡山市内で講演し、命からがら逃げ惑った体験や、荒廃した現地の状況を報告、教育支援の必要性などを訴えた。

岡山市の国際医療NGO「AMDA」が招いた。10万人が殺された。兄の遺体も見つかっていない」

スクリーンにルワンダの難民キャンプ場が映し出されると、マリールイズさんは、惨状を語り始めた。

内戦は、多数派フツ族と少数派ツチ族の対立がきっかけだった。1994年、フツ族出身の大統領が乗っ

取られ、途上、息絶えた母親の乳を飲む赤ちゃんがいたが、気遣う余裕はなかった。目



内戦で荒廃したルワンダでの体験を語るマリールイズさん＝岡山市北区

## 震災の惨状、母国と重ね

の前を逃げていた住民たちが、飛び交う銃弾や爆撃で死んでいった。

それでも、子3人の目をつぶらせて、その場を乗り越えた。約2週間かけてたどり着いた時には、20\*体重が減っていた。

初来日は、内戦前の1993年。青年海外協力隊の研修生として、福島県で洋裁を学んだ。翌年の帰国後、内戦が始まった。

たどり着いた難民キャンプで、福島にいた時のホームステイ先に生存を知らせるため、手書きの日本語でファクスを送った。それが、たまたまその場に居合わせたアマダの医師の目にとまり、日本語通訳として働くようになった。

戦争を止めるのは教育。自身の経験からそう説く。ルワンダでは裕福な子どもしか学校へ通えない。「きょう生きることしか考えられなかった子どもたちが、1カ月学校に行けば視野が広がる。医者、弁護士、教師、裁判官になりた



ルワンダからの避難民が殺した隣国の旧ザイールの難民キャンプ。マリールイズさんもここに避難した(1994年8月撮影、AMDA提供)

い、と夢を語るんです」94年12月に再来日。現在は「ルワンダの教育を考える会」の理事長を務め、講演で全国を飛び回る日々だ。福島市内でルワンダ人の夫や娘と暮らす。

東日本大震災も自宅で体験し、犠牲者が2万人にも上る天災を目の当たりにした。津波でめちゃくちゃになったがれきの山が、ルワンダ内戦での惨状と夕づつてみえたという。

「今こそ、自らの内戦の経験を生かし、日本に恩返しする時」。そう考え、福島県内の避難所を回って、落ち込む被災者の話を聞き、それでも生き抜くことの大切さを伝えていく。

当面の目標は、ルワンダで路上生活を強いられる子どもたちの救済だ。アマダの菅波茂代表は「マリールイズさんと現地の実情を調査した上で、福祉施設の建設など支援の輪をつくっていきたい」と話した。

(西山良太)